慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヂョン・セルデンのこと：その「茶話」をめぐつて
Sub Title	A table talk on John Selden's Table Talk
Author	藤井, 昇(Fujii, Noboru)
Publisher	慶應義塾大学文学部藝文学会
Publication year	1953
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.2, (1953. 2) ,p.55- 69
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00020001-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヂョン・セルデンのこと

——その「茶話」をめぐつて

藤井昇

人は屢〻或る文學作品について、これを成立せしめてゐる cult に氣づかない。思ふに美といふものが既にさういふ cult に於てしか人間に現れて來ない、といふ宿命を負うてゐるのであらう。美への sensibility は案外 cult の放棄への方向にあつて養はれるかもしれないが、これを作品として凝結せしめるものは一種の commitment である。人が或る事を語つてゐる時、他の事をば同時に語り得ないといふ、この簡單なことが實は作品の成立する秘密であり、この秘密を嗅ぎつけることは天才に非ずして却つて常識人の能力である。この場合「常識的」とは cult の稀薄なること、自らの cult を時に客觀視しうる姿勢を意味する。從つて、常識人ヂョン・セルデンの中心にひとつの香りを味はうとする私の aestheticism はひどく手の込んだからくりになつて來よう。とは言へ、管見をかへりみず徒に博雅の心を悟らんとし、研究と銘うちながら所詮は隨筆に落ちざるを得ぬことを恥ぢる。

私がこの十七世紀の法學者に興味を感じたのは、彼が學者としての業績を數多く殘しながら、こゝに私が取り上げようとしてゐる(1)「茶話」*Table Talk* が彼自らの著作ではなく、殆ど二十年にわたつて彼の語るを聞く機會を得た(2)リチャド・ミルウァドの編にかゝるもので、その出版もセルデンの死後三十五年經つた一六八九年である、といふことである。思ふにセルデンには、學者の姿勢を離れて人間としていはゞ(3)普段着で語り出でた樣々の思ひを、是非書き殘さねばならぬと信ずるほどの cult がなかつたのであらう。因に彼は(4)エラストウス派の基督教徒ではあつたが、歷史は彼の死後(5)人々が彼の諸德を讃へながらその信仰に關しては不思議にも口を噤んでゐると傳へてゐる。彼は原始基督教徒をメシヤの來臨を信ずるユダヤ人の一派と考へてゐた(6)し、ローマ教會についてはその學藝

上の功績を否定してゐない(7)。とまれ彼の中に感じられる「常識」こそ、「茶話」を語りすてて書き殘さんとしなかつた所以であらう。又、彼が十七世紀といふ混亂期にともかくも賢明に身を處し得た所以であらう。

ヂョン・セルデンは一五八四年生れ、十七歳でオックスフォド大學のハートホール學寮に入學、一六〇二年クリフォヅ・インの法學生となり二年後イナ・テンプル法學院に移つた、といふ。本來法學者である。一六二一年の大抗議書作成にあたつて主役を演じ、樞密院から禁錮を申渡されたりしてゐる政治人である。又、東洋學に通じ、宗教上の議論ではヘブライ語を引いたりして論ずるので相手は手が出なかつたらしい。「茶話」はミルウァドが項目をアルファベット順に竝べてゐるが、それは *Abbeys, Bible, Church of Rome, Praemunire* といつた今日から見れば餘り興味を引かぬ話題ばかりである。尤も「茶話」といつたやうなジャンルはこの前に Drummond of Hawthornden の *Conversations* があるくらゐで、當時の英國としては珍しいものであつた。Table Talk の名はルターの *Tischreden* (1566) から取つたといふ。併しこの書の內容は、その書名にも似ず、かの *Religio Medici* にも通ふ獨特の晦澁さを持つてゐる。これは常識の持つ晦澁さなのであらう。我々は(8)'The world that I regard is myself.' が却つて常識の結論であることを思ふべきかもしれない。人は絕望する時、晦澁さを失ふものである。

セルデンは決して悠々自適の生活を送つたのではない。當時長老教會派の唱へてゐた神權說 jure divino を否定し、爲にロンドン塔に幽閉されたりしながらも議會主義を主張しつづけた人である。彼の wisdom は決して保身の爲の wisdom にとどまらず、進んでこの社會の惡を解決し、少しでも人間的な社會を築かうとする建設的な wisdom であつた。セルデンにとつてその場合人間的とは實は convenience の謂であつたから、彼の政治觀に理想主義的な heroism は出てこなかつた。彼はよりリアリストであり、さういふ賢明さは彼をして

(9)「田舍娘は、搔き廻してもバタが出來ない時は魔法使が攪拌器の中にゐるのだと言ふ。我々は和を求めて長いこと搔き廻して來たがどうしてもできない。きつと魔法使がゐるのだらう」

とぼけさせ、處世的には(10)「賢者は決してものを決斷してはならない。少くとも世間に決心を知らせてはならない。」とか、

(11)「ヂェイムズ王が階段をゆつくり靜かに降りてゆく繪があつて、各段に Peace, Peace, Peace と書いてある。この時代にあつて最も賢明な生き方は何も語らぬことである」

とか言はしめてゐる。けれども彼は實際には沈默どころか逆に何度も言辭によつて身に禍を蒙つた。こゝにいつも逆說がひそむ。人間といふ生物にとつて、なにかもの思ふといふことがもう既に氣障なことなのであらう。もの思はざる俗衆は'favete linguis'と言はるるを俟たずして「何も語らぬ」といふ地についた表現形式を身につけ、殆ど無意識裡に、ひたすら convenience の線に沿うて政治から理想主義を期待しない。自律神經の如くである。セルデンはいつも一言言はずにはすまされなかつた。僧侶が'divine'の一語によつて勝手なことをしようとする時、默つてはゐられなかつた男である。默つてゐることの賢さを彼はさういふ代償を拂つて知り、その結果は益ゝ喋つたのである。この高價にしてしかも極めて平凡な逆說の上に「茶話」の澁さが立つてゐる。だからこそ偉大なる常識人(12)ヂョンスン博士が之を激賞した。夜獨りでゐることを恐れないやうな人を常識人といふのではない。

(13)「自然さといふことが機智と技巧の土臺になつてゐなければならない。でなければ何をしたところでただ道化のやつたことに過ぎなくなつてしまふだらう。」

「自然さ」nature とは何であらうか？　それはこの時代の概念に從へば、ただものを如實に見ることであつた。そしてセルデンの見たものは恐らく人間の愚かさであつたらう。人間といふ中にはおのれもはいつてゐた。けれども彼は當時の政爭に深入りするには餘りに冷靜であつた。ものが見えすぎてゐたのであらう。しかも大いに活動した點、かのエラスムスを思はしめるものがある。(14)「我々が戰鬪の詳細を知りたがるのは、我々がほかならぬ戰爭の秋に生きてゐるからである。ところが過去の戰鬪に關しては、殺された人數しか聞くことがない。一人の人間の死についても全く同樣で、或る男が病氣になると、我々は彼がこの晩は眠れたか、あの晩はどうか、何を食べるか、何を飲んだか、などと話す。が、死んでしまへば、ただ熱病で死んだとか、或ひは病名を言ふだけで、それでおしまひだ」と語り得るだけのものを持ちながら、現に行はれてゐる爭鬪については關心を失はぬ政治家の眼である。凡そ人間の爭鬪など彼の

眼には子供の喧嘩にしか見えなかつたらう。併し子供と雖も大人の家に放火しうるのである。喧嘩の因は菓子の取り合ひにすぎなかつたかもしれない。彼は政爭の(15)「何れにも加擔しなかつた。彼等は自分達同志でやれるところまで戰つてしまふより仕方がない。そしてものゝ判る穩かな民衆を、それ〴〵の仕事や書物にいそしませておいて貰はねばならない。」

セルデンは、併し、この子供の喧嘩から遁世せずに、菓子の所有權を論じたのである。それは「ものゝ判る穩かな民衆」の爲であり、「宗教の生むかくも大いなる禍」に喘ぐ(16)「哀れなる一般人」poor laymen の爲であつた。これは humanitarianism でなく、健全な常識である。たとへば、瀕死の病人の許にはせつける友人が、腹の底で既に香奠の豫算を立てるだけの思慮を持つてゐるからといつて、その友情の眞摯さを疑ふならば、それは常識といふものゝ健やかさを知らないのである。

(17)「若し萬一にも君が、君の土地をモーゼの法や神の法によつて所有してゐる、と言ひ、それをたてに裁判でやつてゆかうとしたら、君は恐らく敗けるかもしれない。併し國法によつてであるならば確保できる」とするセルデンは、宗教を國家の下に置く點、かのホッブズを思はしめるものがある。尤も(18)議會主義の彼はホッブズとは仲が惡かつたらしい。又彼は帝王機關說で、(19)誰が肉を買ひにゆくか指名するやうなものだ、と考へてゐる。王も亦人間にすぎなく、(20)「王といふものは、この王にしてもあの王にしても皆個人々々である。王樣といふやうな種族があるわけではない」と言つた。王といふ種族を信ずる類ひの誤謬は人間の弱さから生ずるものであり、宗教的政治觀の中にこの弱さを見ることはセルデンにとつて寧ろ當然の結論であらう。併し我々はこの當然さに倦んではならない。何故なら現代に至るまでかつて政治理念が何らかの意味で宗教的でなかつたためしはないのだから。況やセルデンの生きた時代は文字通り宗教的であつた。

「立場を變へることについて」といふ項は、

「立場を變へるかどうかを見てゐるのが人を試す法である。で若し一度變へるほどの弱い人間なら、又變へるだらう。」(一)

といふ彼の言葉を記してゐる。餘りに principle のない人間は恐らくセルデンの好まぬ所であつたらう。けれども同時に彼は

(21)「ゴ：リング大佐は最初一方について、次に反對側へついたが、これはどつちに風向きが變つても挽きやうを知つてゐる良い粉屋の

やうなものであつた」

とも言ひ、(22)「惡天候の際テムズを舟でゆくやうに……波に隨つて舟を上げ下げ」する隨順の智慧をも說いた。この兩者を共に味ふべき言葉としてうけいれるのは最早讀む者の精神の flexibility にかゝつてゐよう。

こゝまで書いて來て、私はふと氣づいた。自分はセルデンの笑つた顏を一度も思ひ浮かべてゐない。これは何故であらうか？「茶話」にはもとより

(23)「トルコ人たちは、民衆に向かつて、天國のことは五感の快樂のある處だと話すが、地獄については何やら判らぬ苦をうけるべき處だと言ふ。基督教徒はこの順序を全くひつくりかへしてゐる。彼等は、地獄のことは、五感の苦をうける處だと言ふが、天國については何やら判らぬ樂しみを享ける處だ、と言ふ」

といつた澁い humour があるが、何故か私はセルデンが少くとも眼だけは笑つてゐないのを感ずる。この言葉は何時誰に向かつて斯く語られたのであらう。同じく

(24)「僧侶は我々の理性に反しても自分達の言ふことを我々に信じさせようとする。丁度、女が他の男と一緒にゐるところをつかまつても、なほ夫に目のあたり見たことを信じさせまいとするやうなものである。女は頑强に否定する。『何ですつて！ ご自分の可愛い女房の前でも貴方はご自分の眼を信じようとなさるんですの？』」

も、言はうとする目的が目的なだけに背景は暗いのである。Melancholy England といふ先入觀のなすわざであらうか？ 併し *The Anatomy of Melancholy* は却つて微笑の書である。同じく僧侶を難する言葉の中に、セルデンは、(25)「いつたい一人の王が天國に行かなくても、連中にとつて、又ほかの人達にとつてだつてさうだが、どうだといふのだ？」と突放してゐるが、かうしたものの言ひ方をバートンは決してしなかつた。バートンは自らを Democritus Junior と呼び、博引傍證のかげに孤獨を伏せて detachment のわざを完成した。セルデンは心つねに遊ばず、彼にとつて人間の現實とは、他人が天國に行けなかつたところで痛痒を感じないといふ身も蓋もないものであり、人間は(26)「自分が實際考へてゐるよりほかには心に考へやうがない」のだから、自分が何を爲すべきか他にアド

ヴァイスを求めることは、(27)「恰も自分の足で何處か或る場所に行つてよいかどうかを訊くやうなもの」で、いつたい(27)「ほかに行きやうがあつたら教へて貰ひたい」と言つてはゞからない。そこから形式の必要も説かれ、

(28)「儀禮といふものは一切を支へてゐるものだ。高價な酒か、何か貴重な水を容れておく安物の盃に似てゐる。これがなければ水はこぼれ、酒は失はれてしまふ」

と言ひ、お世辭や手にする接吻といつたやうな儀禮がなかつたら、(29)「御婦人達は世の中で一番慘めな生きものになつてしまふ」といふ女性論に赴き、併し(29)「唇にした後で手に接吻するのはリンゴを食べた後……皮にまで手を出す子供と同じやうに思はれる」と皮肉つてゐる。要するに形式を説くことは彼の衣裳哲學で、とどのつまりは自分は鯱鉾立ちしても遂に自分であつて他人にはなれないといふことを底に踏まへてゐるのであつた。セルデンは自分の魂が天國に行けなくとも誰も何とも思はないことを知つてゐた。セルデンは恐らく天國を信ずるほどの神秘家ではなかつたらうからそれは問題ではない、と考へるのは、孤獨をたしなまぬ皮相の見であらう。形式といふも政治といふも、皆彼にとつては人間と人間との隔絶をせめて爭鬪せしめざる手段であつた。法治主義である。彼は(30)「一般に法律に對して良心を主張することは危險である」との原則に立ち、(31)「聖書に書いてあることだけしか容認してはならないとなると、聖書に議會のことは書いてないのだから、議會はどうなるのだらう」と皮肉つた。これらを支へてゐる孤獨の原則すなはち「茶話」の精神であらう。思ふに女性論、結婚論が satirical に傾くのは當然であつて、

(32)「結婚は絶對絶命のものである。イソップの中の蛙はひどく悧口だつた。大そう水が欲しかつたのだが敢て井戸に飛び込まうとしなかつた。二度と出られないからである。」

(33)「妻を持たうといふ男が、彼女の裝身具一切の費用を引受け、彼女が廻す勘定を一切拂ふべきは當然である。猿を飼はうといふ人は猿が毀すコップの代金を當然支拂ふべきである。」

(34)「……或る御仁が二日三日うろうろした擧句、結局家へ歸つてくる。そして奥樣と一緒にお寢みになる。奥樣の氣の進まない或る事をしたかつたのだが、奥樣は妥協しないで、隨分長く家を空けたのね、とお叱言。『よしそんなら、と御仁は言ふ、お前が厭なら、

スュウ（奥様の小間使の名）を呼んでおいで。』すると忽ち奥様は降參した。」

など love に對する不信は思想的に古典主義の系譜に屬する。古典主義とは思ふに結婚をも含めて生活の幸福を愛情によりは寧ろ智慧に求めんとする技術の謂であらう。(35)「美人の細君を持つてゐると他人には幸福と思はれる」が(35)「我々は自分の持つてゐるもので滿足することは決してない」といふ Horatian wisdom であり、結局は(36)「人間一生の凡ゆる行爲のうちで、結婚は他人に最も關はりがない」にもかゝはらず「他人に最も干渉をうける」と突放ね、その privacy を重んずる精神はセルデンの場合最後にはさきの人間觀へかへつてゆく。中庸論亦然りであつて、ルネサンス・ヒューマニズムの一面と言つてしまへばそれまでゝあるが、セルデンに關する限り、矢張(37)「人間間の相違は大變に大きい。到底同種族だと考へられない位だ」といふ隔絶の意識を考慮に入れねばならない。彼は(38)過度の禁欲を創造主に對する侮辱と考へ、禁欲を說く連中は自分達がそれを享受できないから腹いせにやつてゐるのだと言ふ。これは信仰の言といふより却つて(39)「宗教を自らの庇護の下におき、他人に大變恰好な教說であると考へてゐる人のことば」であるが、知性人セルデンにあつては教養とは(40)何處で止まるべきかを知ることであつたらう。Jure divino 反對の合理的精神にしてもが、決して極端にはしらず、

(41)「大敵のことを惡く言つてはいけない。寧ろ君が彼の手に偶ゝ落ちた時、それだけ扱ひがよいやうに甘いことばを與へておけ。これをイスパニア人が死にかかつた時やつた。懺悔聽問僧が彼に（悔恨の情を起させようとして）如何に惡魔が地獄に落ちた惡人を責めさいなむかを語つた。イスパニア人は返事に惡魔のことを御前（ミロード）と呼んだ。どうぞ惡魔の殿樣がそれほど殘酷でありませんやうに。坊さんは彼を咎めた。御前と呼ぶのを勘辨して下せえ、と奴さんは言ふ。あつしア誰の手に落ちるか判りませんのでね、で若しあいつの手に落ちた時、惡く言はなかつたツてンでそれだけ扱ひがいいやうにと思ひやしてね。」

といふ世間智と並行してゐる。正にラサリーリョ・デ・トルメスの智慧、亂世の倫理であるが、このやうなふてぶてしさの魅力に氣づいたセルデンが、一方、語脈の判らなくなるほどの長いラテン語で、凡そポピュラでない(42)「退屈で讀むにたへぬ」といふ著作をものした學者であり、又、議會では正面切つて政論をたゝかはし、そこには常に合理主義の匂ひのたゞよふ政治人であつたことは興味深い。

(43)「金錢は人を笑はせる。盲のヴァイオリン彈きが一群の人々に向つて彈く。下手糞なので人々が嗤つた。手を引いてゐるその悴がそれを見て泣いていふには、父ちやん、行かうよ。みんな嗤つてばかりゐるよ。

——ま、ま、靜かに、な、とヴァイオリン彈きは言ふ。直にお金が貰へるよ、そしたらこつちから嗤つてやらう。」

と語つてゐるセルデンは恐らく自分の邸にはかうしたピカロ的世間智を持たず、少し馬鹿で謙虛な下男を雇ひ入れさせただらう。その「謙虛」について、(44)「主人は召使に、俗人は僧侶に、僧侶は俗人に對して恰好な教訓だと考へてゐる」が(44)「誰も實行せず、しかもそんな說を悅んで聞く、といつた類ひの美德」だと語り、時には(45)「餘りに自己を卑下するならば、それは彼をして神にも人にも無益なものとせしめるであらう」と語りながら。

私ははじめ、セルデンの思想を幾つかの項目に分け、これを立證するやうな言句を「茶話」から拔いて論ずるつもりであつたが、(46)「古い友達が一番いゝ。ヂェイムズ王はいつも古い靴を出させたものである。古い靴が足に一番よく合つたからである。」なる一句に遭つて、遂にそれが徒勞ではないかと疑ふに至つた。何故ならこゝで批評は沈默してしまふからである。しばらく私はこの友情論をめぐり、「形而上學の一步手前で立止」らず、かと言つて深入りもせず、一步立入つたあたりで筆を進めてみたい。

人或ひはさきの人間相互の隔絕の意識を擧げて、セルデンの、もしくは私の、論理の矛盾を衝くかもしれない。到底同種族とは思へぬと人間を感じたセルデン、法治主義に徹したセルデンが、果して友情を知る能力を有したか、と問ふかもしれない。何れが眞であるか、と迫るかもしれない。何れも眞である、と答ふる外はないのである。ホラーティウス、モンテエニュ、シェイクスピア、古より偉大なる現實主義者の書は悉く何かダマされてゐるやうな感を我々に與へるのである。我々はゆめダマされてはならず、然るのち欣然として彼等の詐術にみづから身を投じねばならないのである。これ人生を娛しむの謂であらう。またそれ故にこそ一切の書には、これを讀む者の姿勢如何といふ問題が、思ひもよらぬ重要性を以てつねに附隨、いな本質をすらなすのであらう。併し私は今こゝでさういふ問題をあげつらふつもりはない。「古い友達が」のこの一文が、セルデンの人間觀が、斯くの如き反面を有してゐた、といつたやうな意味

でなく、この「茶話」一卷の語錄のうち、いはゞ我々の批評を拒否する唯一のものだ、といふ意味で、私にとつて重要だからである。こゝで問題は冒頭の「美」の秘義へとかへる。友情についての、このありふれてはゐるが極めてほのぼのとした感想の美しさは、決して將來を向いた姿勢からは生れない。ニューマン卿が(47)同じやうな想ひを洩らした時、彼はかの「アポロギア」を書いてゐた。セルデンも「追憶」といふ姿勢で過去を向いてゐる——過去を向くといふことが、そのあひだにも死に向かつて生きつづけてゐて靜止といふことのゆるされてゐない我々人間にとつては、既に cult たるをまぬがれないにしても、將來に向いて cult を築かず、過去を向く、といふ、まさにその一事によつて、あの how to live の解答としての cult を持つてゐる人々に特有な粘つこさ、あくどさが感じられない。「時は一切を、記憶をもまた、運び去る」からであらう。にもかゝはらず、人間が何だかだと自己を將來に向けて態度づけながら生きつづけてゆくさまは、何といふいのちの勁さであらうか。現在といふものが斯く秘義として閉され、それゆえに人間の健康といふものが支へられてゐればこそ、セルデンの心がふと追憶に息づく刹那、美しい友情のよそほひでそこに投影される永遠は永遠の影であつてつひに永遠そのものではあり得ない。言葉とは欲望である。すなはち眞實の言葉などあり得ない。「諸神もまた創造のこなたに」屬する所以であらう。之を註して曰く、(48)'There is nothing strictly immortal but immortality.' しばらく(49)「幻影の人」と註するも所詮は註にとどまる。併し註をおいて永遠はなく、これを註と感じることは人間の感じかたにすぎないのであらう。とはいへ、セルデンの「友情」についての章からは、友情いかにあるべきかといふ何のゾレンも湧いて來ない。キケローの友情論と聊かその趣を異にする點である。(50)却つて「有朋自遠方來」の心に通ふであらう。人間にとつて眞實は retrospective にしか把握、いな象徴されえない、といふのが凡ての現實主義者の暗默の前提である。思ふに精神のおのづからなる衞生作用であらうが、何を隱さう、古典主義において思想とは衞生作用に外ならない。從つて一度ゾレンといふ未來の場に向へば、彼等の思考は utilitarian にならざるを得ない。智慧とは高次の打算である。打算ならざる時節は過去へ commit した時のみであらう。セルデンが友人に對して、キケロー的な友情の倫理を體して、さういふ意識で行動してきたとは思へない。さればこそセルデンの友情論は人間隔絶の觀察と共存し得、また、凡そ現實主義者が美の cult を以て、鹽噌に事缺かざらん爲の處世訓となし得ぬ所以もこゝにあると思はれる。セルデンがこの友情論をふと洩ら

した雰圍氣は、極めて月並ながら、暖爐の火のあかく燃える夜の持つそれである。セルデンの腦裡に去來した友情は、彼が信義を重んぜんとのゾレンによつて支へてきた友情ではなく、凡そ友情といふものがさうであるやうに、いつのまにか古き友であつたといふ類ひのそれであらう。實はキケローにおいてもこの事情は同じで、*De Amicitia* は一種の形式と見る方が公平なのかもしれない、我々は自分の靴の古くなつてゆく過程を毎日意識はしない。

更に言ふ。セルデンは人間不信の思ひを誰に向つて語らうとしたのであらうか？「古い友達」といふものだけは別拔ひにして、彼はその法治主義を考へたのでもあるまい。と言つても私はこゝで、性惡說は性善說の前提なくしては成立たぬ、などといふ論理を弄するのではない。人間相互の隔絕はセルデンにとつて極めて現實感を以て迫つてくる意識であつた。にもかゝはらず、一時の茶飲み話に、否、茶飲み話なればこそ、彼がこれを洩らしたといふ事實は、彼の弱さ、もしくは人間といふものゝ弱さを物語るものではなく、むしろ人間の人間に對する不信といふものゝ必然のすがたである。古人あつて「菩薩は默して一切の苦を忍ぶ」と言ふ。このやりきれぬことばを書きのこすことによつて彼はやりきれなさに輪をかけたわけであるが、それがたかだかもの思ふ者の孤獨であらう。書かうとさへせず、座談に消えしめたセルデンは却つて純粹かもしれない。併しミルウァドは餘計な世話を燒いたのではない。私は今「たかだか」と言つたが、これは自虐ではなく、むしろ藝術への頌歌である。「世界の僞かたまつてひとつの美遊となる」のであらう。藝術の事一として虛妄ならざるはなく、夢中に夢を說くの類、紛紜なる正當である。かういふところに身を置いて *The Anatomy of Melancholy* の著者は微笑した。セルデンに同じ微笑がどうも豐かに感じられないのは、美遊の心を缺く故ではないか。ただ右の「古い友達が」と語り出でる時にのみ、セルデンにもさういふ季節が訪れる。繰返していふ、僅か二行のこの美しい友情論は、その友情を成立させてゐる要件ではない。要件はこの二行を書かしめた心であつて、言葉ではない。心はつねに不可得、言葉はつねに冗餘である。古典主義に於ては語らずもがなの言葉がうつくしい。冗餘なくしては併しつひに心もあり得ない。

だからセルデンが恐らくは暖爐の傍らの追憶を離れて、目を現實に向けた時、彼の意識は再び法家的な人間觀を採らざるを得なかつた。つまり同じものゝ裏表であらう。彼はいはゞ人間に匙を投げた姿勢で人間の問題に干與する。(51)「宗教は手品師の使ふ紙きれの役を

する。今、馬になつたかと思ふと、今度は角燈になり、舟になり、男になる。目的に副ふためなら、宗教はどんな形にでもなる」と、彼が言ふ時、「目的に副ふためなら」何でもするのは、宗教にとどまらず、人間自身の姿であつた。思想とは adaptation にすぎない、といふ甚だ英國流の生活意識である。

「咎むべきは——と、セルデンは「欺瞞」の章に言ふ——欺瞞に非ずして甚だしき欺瞞である。世の中は欺瞞なしでは[52]をさまつてゆかないからである。君の美辭麗句にしたつて、辯駁の論理にしたつて、要するに一切欺瞞の枠内のことだ。」人間はつねに[53]「自分を尺度にしてものを計り、おのれに役立ち、おのれの目的に適つてゐると、それを是認する。」

常識はつねに懷疑家である。常識の歸つてゆく所は「世の中はそれではをさまつてゆかないから」といふ前提で、この論理は個人にあつては「それでは生きてゆけないから」といふ甚だ明快な excuse となる。人屢〻この excuse の强靱なるを忘れ、英文學を「思想的に深味のない文學」と呼ぶ。恰も文學また tolerance を學ぶのわざに盡くるを知らざるが如くである。何ぞ知らん、この國の住民はW・ルイスがその *The Lion and The Fox* にM・アーノルドを引いて[54]指摘した如く、餘り頭が切れすぎない、といふ點に却つて聊かの誇りを抱いてゐる。生を犧牲にしてまで一つの思想を追求することは常識からは folly にすぎない。セルデンはこの意味では英國人の一典型であつて、[55]英國人の主たる三つの關心事、政治、ビジネス、宗教、に强い關心を示した。常識の强靱さは、併し、却つて人間の健康さの證かもしれない。それは folly の存在を倫理的にもまた論理的にも否定してゐないからだ。常識が本來有してゐる nil admirari の智慧は、クリスピーヌスが避けんとする程度の admirari ぐらゐは呑み込んでしまふ。現代ならたかだか新聞記事である。一人の人間の死を報じた新聞も、ひとしく包み紙にしてしまふのが常識の勁さである。常識は[56]ボズウェルのやうに「君、あと十二ヶ月經つたらこれもまたどんなにつまらないことのやうに見えることだらうよ」などと教へられて感心するまでもなく、olim meminisse iuvabit の理を本能的に知つてゐる。「たとへそれでは生きてゆけなくとも」とは、たかだか精神の病氣にすぎない。[57]社會は自らの中に治癒力を藏してゐる、とG・S・フレイザ氏は語り、[58]旅行でもすれば憂鬱は治る、といふのがバートンの療法の落ちつくところである。既に病氣であるからには、治るのも生きてゐることが條件である。むしろ病むといふことこそ生存の證左であらう。人間存在の

哀しさの極みとも言へようが、逆にこれは小人の智慧と蔑まれるかもしれない。併し人生の中心地はつねに小人の棲家であり、セルデンは大人になるには餘りに足が地につきすぎてゐた。ラ・ロシュフコオは大抵の vertu は假裝された vice にすぎず、amour propre のなすわざであると言ひながらも、恐らくは何處か遠くの世界に靜穩な白光を投げてゐる vertu を想つてゐる。セルデンにとつてさういふ世界はあつただらうか。彼は(58)「我々は人間に喋ることには注意を拂ふ。併し神には何でも喋れる」といふ。若しこれをラ・ロシュフコオが言つたとしたら、サタイアたることは失はないにしても、ひびきは全く違つて來よう。セルデンの tolerant な言辭から、直ちに溫厚なる一君子人を想像し得ない理由はこゝにある。事實、彼は多くの政敵を持つてゐたし、また何かと言へばギリシア語ヘブライ語を引いて相手を論破せんとする男に、個人的憎惡も少かつたとは言へない。すなはち彼は、論理で相手を敗北せしめることが自らの tolerance の精神と矛盾しない、と考へたほど頭が冴えてゐたのである。彼の敵は要するに非合理的なところから發する intolerance であつた。彼は人生に對して欠伸をしてゐたが、小人の世界では欠伸を嚙みころすすべも心得てゐた。惜しむらくは頭の冴えたまゝで欠伸を嚙みころしたことである。併し《Je mourrai seul.》と人もいふ、一般に他人が斯くあれと希ふ姿に、その人間が似てゐなかつたとしても、それはその人間の知つたことではない。

(June, 1952)

註

(1) 原題 *Table Talk: being the Discourses of John Selden, Esq. Being His Sense of various Matters of Weight and high Consequence: relating especially to Religion and State.* こゝに使用したテクストは *The Table Talk of John Selden, ed., with an introduction and notes, by Samuel Harvey Reynolds, Oxford, 1892.* 尙 *Table Talk* の原本は失はれてをり、text criticism についても問題があるやうであるがどのみち諸種の MSS. を實地に參照する機會は望むべくもないので、右テクストに從つた。「茶話」てふ譯語も決して滿足してはゐない。

(2) Richard Milward (1609〜80) セルデンの書記。後に rector of Great Braxted and canon of Windsor.

(3) Reynolds' introd. p. xxv.

(4) Thomas Erastus といふ十六世紀スイスの神學者にその名を引く。宗教を國家權力の下に置くといふ立場であるが、英國の所謂 Erastians の考へは Erastus 自身のそれと必ずしも同じではなかつたらしい。John Lightfoot もこの派のヘブライ學者であつた。

(5) James Usher, Earl of Clarendon 等。Introd. p. xxi ff.

(6) 茶話「基督教徒」一。

(7) 同 「書物・著者」四。

(8) *R. M.* xi.

(9) 茶話「平和」二、尙以下「茶話」の譯稿については畏友喜多島久夫君に種々御批判を賜はつた。こゝに記して謝意を表する。

(10) 茶話「智慧」一。

(11) 同 「平和」一。

(12) Introd, p. xxv.

(13) 茶話「機智」二。

(14) 同 「戰爭」一〇。

(15) Introd, p. xvi. 傍點引用者。

(16) 茶話「司法權」二。

(17) 同 「議會外に於ける僧侶」六。

(18) Introd, p. xxi.

(19) 茶話「王」一。

(20) 同 「王」三。
(21) 同 「立場を變へることについて」三。ゴーリング大佐についてはテクスト p. 33 note に詳しい。
(22) 同 「權力・國家」一〇。
(23) 同 「基督教徒」二。
(24) 同 「僧職」二。
(25) 同 三。
(26) 同 「意見」四。
(27) 同 「誓言」七。
(28) 同 「儀禮」一。
(29) 同 二。
(30) 同 「良心」三。
(31) 同 「人間の拵へたもの」二。
(32) 同 「結婚」三。
(33) 同 「妻」三。
(34) 同 「誓言」八。
(35) 同 「妻」一。
(36) 同 「結婚」一。
(37) 同 「人間間の相達」。
(38) 同 「自己否定」

(39) Introd, p. xxii.
(40) 茶話「聖書」一一。
(41) 同　「悪口」三。
(42) Introd, p. xxiv.
(43) 茶話「金錢」一。
(44) 同　「謙虚」一。
(45) 同　　一一。
(46) 同　「友達」この項はこれだけである。
(47) *Apol.* part vi.
(48) T. Browne: *Hydriotaphia.*
(49) 西脇順三郎著「古代文學序説」序論。
(50) 福原麟太郎著「英國隨筆史」p. 15 にもこのセルデンの一句が引かれ、論語に言及されてゐる。
(51) 茶話「宗教」一五、傍點引用者。
(52) 傍點引用者。
(53) 茶話「もの〻尺度」一。
(54) *The Lion and The Fox,* p. 16.
(55) Introd, p. ix.
(56) *The Life of Samuel Johnson,* 1763.
(57) *Post-War Trends in English Literature,* Chap. 9 A.
(58) *Anat.* II, ii, 3; III, ii, 5 參照。
(59) 茶話「祈禱」七。

(終)